

- [ニュース](#)
- [コラム](#)
- [フォトギャラリー](#)

フィギュアスケート 特報

プルシェンコの連覇を妨害した!? 米国人ジャッジ、疑惑の E メール。 ～五輪でのロビー活動の真実～

田村明子 = 文 ⇒この著者の記事一覧

text by Akiko Tamura

photograph by Takuya Sugiyama/JMPA



フィギュアスケート男子で4回転無しの王者が誕生し、4回転を跳んだエフゲニー・プルシェンコが結局2位。この1位、2位の結果をめぐる、五輪開催地のバンクーバーだけでなく世界中のフィギュア関係者の中で論争がおこっている。

だが実はこの問題、単に「4回転ジャンプの評価が正当かどうか」という技術的な問題だけではなかった。

日本ではほとんど報道されていないが、プルシェンコに対する北米フィギュア関係者によるロビー活動が事前に行っていたのである。日本では単に「プルシェンコが負け惜しみを言っている」もしくは「4回転ジャンプは最近の採点方法だと不利だった」という報道が多いようだが、それらの記事は、この騒動の表面しかなぞっていない。

欧州選手権後の取材でプルシェンコは自ら弱点を認めた？

《欧州選手権後の取材報道で、ある選手から「私たちのプログラムはジャンプに集中しているので、トランジション(5コンポーネッツのうちの一部門で、ジャンプなど要素間のつながりのこと)はあまり考慮していない」という発言が出た。選手自らがないと認めている場合、我々ジャッジはこれをどのように採点に反映させるべきなのだろう？ 興味深いと思わないか。》

こんな内容のEメールが国際ジャッジとスケート関係者たちに送りつけられたのは、1月の欧州選手権が終了してしばらく経ってから、バンクーバー五輪開幕を1週間後に控える2月3日のことだった。送り先は60人にも上ると言われていた。

送り主の名前はジョゼフ・インマン。

米国人で、昨年夏にはISU(国際スケート連盟)セミナーの講師も勤めたほどのベテランISUジャッジである。メールには選手の名前こそ書かれてはいなかったが、その発言は欧州選手権で優勝したばかりのロシア代表プルシェンコが、自分とブライアン・ジュベール(フランス)のことについて語ったセリフそのままだった。ふたりのような4回転ジャンパーにとってはトランジションを入れる余裕があまり無いのだ、という意図での素直なコメントに過ぎなかった。自らの弱点を認めたのは、それでも勝てるという自信があったためなのだろう。

インマン自身はバンクーバー五輪の審判団に含まれておらず、送信先60人ほどの中に、いったい何人の五輪ジャッジが含まれていたのか正確なところは分かっていない。メールを受け取ったことを公に認めた一人、米国ナショナルジャッジの資格を持つジョージ・ルサノは、メール内容を問うた私にこう説明してくれた。

「メールの内容は、報道されている通りだよ。だがインマンの意図は、五輪の結果に影響を与えようというものではなかったと思うね。以前から彼はプルシェンコのトランジションを非難していたから、『ほら、本人も認めた。どうだ、おれが言った通りだろう』という自慢をしたかっただけじゃないかな」

しかしこの後、インマンのメールの内容は受け取った60人のパソコンの中だけに留まることにはならなかったのだ。

疑惑のメールが世界中に広がり、北米メディアが煽り立てた。

メールが送信されてから2日後となる2月5日。フランスのレキップ紙がそのメール内容をすっぱ抜き「北米のロビー活動がスタートした」というフランスのフィギュアスケート連盟会長のコメントと共に掲載したのだ。欧州のフィギュアスケート界は、騒然となった。

だがその報道が北米へ渡ってくると、論調はインマン擁護に変わっていた。

2月15日のUSAトゥデイでコラムニスト、クリスティ・ブレナンは、「ジャッジが、ちょっと遅いヴァレンタインデーのプレゼントとして気前よくプルシェンコに5コンポーネッツで高い点数を与えたら、彼は五輪でも優勝してしまう可能性がある。だからこそ、インマンの疑問は関係者すべてが持つべきだ」というコラムを掲載。スポーツイラストレイテッドの

E.M.スウィフトは「インマンはフェアな人物である。彼はプルシェンコ本人の言葉を単に引用したに過ぎない」とまるで本人を個人的に弁護するかのような記事を書いた。ニューヨークタイムズ紙にジェレ・ロングマンが執筆したコラムにいたっては、「個人(インマン)の無垢なメールに、フランス、ロシアが過剰反応をしている。冷戦は終わったはずなのに」という、一連の報道をからかうような論調となっていた。

私は、どの記事の中でも言及されてはいなかったが、しかし非常に重要な事実がひとつあることに気がついていた。レキップ紙の記者はおそらく知らなかっただろうが、北米のスケート関係者なら誰でも知っている重要な事実。

“メールを送ったインマンは振付師のローリー・ニコルの親友である”ということ。

ニコルはアメリカ出身の振付師で、現在カナダのトロント郊外に住んでいる。ミシェル・クワンの振付を担当したことでフィギュアスケート界では非常に有名になった人物である。そして彼女は、インマンと協力しあって国際スケート連盟(ISU)で現在採用されている新採点方式の内容に深くかかわった経歴を持つ。

そして、ニコルは今季、カナダ代表のパトリック・チャンのコーチを務めるほか、アメリカ代表のエヴァン・ライサチェクなど多くの北米選手のプログラムを手がけている。

抑えられたプルシェンコのトランジションスコア。

男子 SP の日、私はメディアルームでベテランのスポーツコラムニスト、ロングマンにこう聞いた。

「あなたは NY タイムズのコラムの中で、インマンとローリー・ニコルが親友同士だということに触れていませんでしたが、それはなぜですか？」

「それは重要なことではなかったからね」

「では立場を逆にしてみましょう。メールを送ったのがロシアのジャッジで、このジャッジが、プルシェンコのコーチの親友だったとしたら、重要なファクターにはならないのでしょうか？」

「……OK。それは重要なことなのかもしれない。でもそれが何なのですか。現に、プルシェンコはこうして 1 位にいるのだから別にいいじゃないですか」

この会話を交わしたのは、男子 SP 終了直後のことである。

確かにプルシェンコは 1 位だったものの、トランジションが 6.80 と際立って低かった。果たしてこれは正当な採点なのか、あるいはインマンのメールの影響がいくらかあったのだろうか。

テレビのコメンテーターとして会場で見ている本田武史に感想を求めると、こう答えた。

「他の選手がやっていたことと比べても、プルシェンコのトランジションの点は、かなり抑えられていたという印象でした」

共に完璧ではなかったプルシェンコとライサチェクのフリー。

この日のプルシェンコの演技と欧州選手権での SP の演技を子細に見比べてみると、3 アクセルの着氷時にエッジチェンジを入れるなど、五輪では意識的にトランジションを増やしてきたのがよく分かる。しかし結果は、欧州選手権での評価点 7.55 に比べて 0.75 も低くなっていたのだ。

SP でただひとり 4 回転+3 回転のトゥループを成功させたのにもかかわらず、3 回転ルッツ+3 トゥループを跳んで 2 位だったライサチェクとプルシェンコの点差は、わずか 0.55 しかなかった。

そして……プルシェンコはフリーで逆転された。

その夜の彼は決してベストな演技ではなく、何度かジャンプの着氷でぐらついた。それでも 4 回転+3 回転を成功させ、転倒も、着氷時のステップアウトなどの大きな失敗は無かった。

一方のライサチェクは迫力ある演技だったが、普段のスピードに欠けていた。技術的にも決してベストではなく、3 アクセルの着氷でちょっともたつき、3 フリップではエッジが正しくないという減点もされている。SP、フリーを通して 4 回転に一度も挑まなかったわけだが、それでもライサチェクは逆転し、王座を奪った。

あのメールさえなければ連覇を達成していたかもしれない。

インマンのメールが与えた影響は、いったいどれだけあったのかは分からない。ただ……このメール騒ぎがなければ、あるいは今回の五輪の舞台が北米でなければ、プルシェンコはおそらく五輪 2 連覇を果たしていただろうと、私は思う。

勝利の瞬間、喜びにひたるライサチェクの横にピタリと寄り添って座っていた女性。彼女こそメールの送り主インマンの親友にしてライサチェクの振付師ローリー・ニコルだった(コーチはまた別にいる)。ライサチェク本人は何も後ろめたいことなどしてはいない。だが、プルシェンコは、完全に北米勢にはめられたのだという印象だけは、私はどうしても拭うことができなかった。

いまだ北米社会に根強く残る「ロシア憎し」の感情。

筆者は米国に在住して 20 年以上がたつが、北米社会の「ロシア憎し」の感情の強さは、今でも日本人には理解しがたいほどのものだと感じることもある。対ロシアとなると、関係者と報道メディアが一丸となって「ロシアが我々よりも優れているわけではない」ということを証明しようと躍起になるのだ。

ロシアと北米勢の間のフィギュアスケート判定でひと悶着起きるのは決して偶然ではない。そして、その傾向は北米での五輪開催時にいっそう強くなる。

2002 年ソルトレイクシティ五輪のペアジャッジ疑惑事件(ロシアとカナダの代表間にあった判定疑惑で新採点システムへのきっかけとなったとされている)も、「不正があった」と言われているが、その真相は明らかにされていない。「プレッシャーを受けた」と発言した当時の五輪ジャッジのいう「プレッシャー」とは具体的にどの程度のもので、どのくらい

採点に影響を与えたのかは不明のままである。北米の異常なまでにヒートアップした報道に、IOCとISUが追加で金メダルをカナダ代表のペアにも授与して、その詳細も不明なままに、早々に事態を鎮める解決法を選んだのだった。

冷戦はいつまで続くのか？

インマンのメールは、北米メディアの煽りによって、おそらく本人がもともと意図していた以上の騒ぎとなり、打倒ブルシェンコの空気を作り上げた。日本のマスコミだったら、一人の選手に対してここまであからさまに反感を煽るような報道は考えられない。

私はロングマンにこう聞いた。

「北米のジャーナリストにとって、報道の公平性というのは大切ではないのかしら」

「私はジャーナリストではなく、コラムニストだ。コラムニストは自分の意見を売るのが仕事で、政治家と同じ。いわばロビーイストだ」

ロングマンはそう言い切った。

ブルシェンコはこうした敵意が渦巻く北米メディアに囲まれながら、闘いに挑んだのである。正直にいうと、バンクーバー五輪開催前から、きっと何かあるだろうことを私は予想していた。

だが1990年代初頭に、冷戦は終わったはずではなかったのか。

このような国家対立感情やロビー活動なしで、フィギュアスケートの演技を純粋に楽しめる五輪はいつになったらやってくるのか。

いよいよ明日、日本中が注目している女子のフリーが行われる。メダル候補は日本のほか、韓国、カナダなどの選手だ。だが国同士の面子をかけた争いではなく、個々の選手の素晴らしさを純粋に堪能できる戦いになってくれることを、心から願っている。